# 流星のロックマン４　～Ａτλαντ??　mystery～

nasubiboy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン４　～Ａτλαντ？？　ｍｙｓｔｅｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ４６１５Ｚ

【作者名】
ｎａｓｕｂｉｂｏｙ

【あらすじ】
地球の危機を3度も救ったロックマンこと星河スバル。彼が中学生になるころ事件は起きた・・・　ＷＡＸＡ調査隊の謎からすべてが始まる。謎の大陸とは？　闇の組織の計画とは？　すべての謎が解けた時、組織の計画とムー大陸滅亡の謎が解ける！交錯する想いと運命の中でスバルは世界を救えるのか？

記念すべき（？）なすびの一作品目！（流星シリーズ知ってること前提で書いてますんで宜しく）

## プロローグ　～ＷＡＸＡ調査隊～（前書き）

始まりました
駄文ですんません
これから１００話目指して頑張ります

# プロローグ　～ＷＡＸＡ調査隊～

とある謎の地・・・

「こっこれは！あの大陸の遺跡？」

ＷＡＸＡ調査隊のリーダーは言った。

「リーダーこっこれは大発見ですよ！すぐにＷＡＸＡへ連絡を」

「ああ、勿論だ、これは人類史に残る大発見だろう。この大陸の発見は人類の発展にとって・・・」

と、その時・・・

グラグラグラ～　ドドドドドド！！

「リーダーここ崩れます！はやく退避を　ぐ、ぐあー」

「・・・ポセイドン？・・・」

・・・これはスバルが巻き込まれる大事件の序章だった・・・

## プロローグ　～ＷＡＸＡ調査隊～（後書き）

・・・

感想よろしく

## 中学校の準備（前書き）

やっと、学校終わりました

## 中学校の準備

ここはコダマタウン、ロックマンこと星河スバルが暮らしている。

「Ｚｚｚ・・・　Ｚｚｚ・・・」

『おーいスバル起きろ！！！　今日はスピカモールに買い物だろ！！！』

叫んでいるのはウォーロック。ＦＭ星育ちのＡＭ星人だ。

「う～ん・・・っは！いま何時？」

『８時半。約束は９時だぞスバル』

「やば～い！委員長に怒られる！」

朝ごはん、着替えを風のように済ませ、ギリギリのところでバス停へ。

「スバル君おそいじゃないの。まあいいわ、それよりゴン太よ！」

この女の子は委員長こと白金ルナ。あだ名のとうり小学校では委員長をやっていた。

中学校へ行ってもやるつもりらしい。

「ゴン太君、また牛丼ですかね。朝から牛丼って」

この小人のような少年は最小院キザマロ。マロ辞典を使いこなす

物知り。

「ははは、違いないね」

と、スバルが笑ってるとこで奥から走ってくる人影。あれがゴン太、よく食べ、よく遅刻する。

「ごめん委員長。なんせ朝の牛丼が・・・」

「行くわよ。もう！」

と、一行はスピカモールへ中学校で使う物を買いに行くのだった。

そして…スピカモールについた。

「ふひ～。まずは教科書のプログラム取りにいこうよ」

「えっ、まずは牛丼「お黙りゴン太！スバル君の言うとおりにしなさい！」」

というわけでプログラムやら、制服やら、靴やら、（ゴン太は牛丼用の紅ショウガも）を買った。

「よし買い物終わりね。つぎは・・・」

「委員長！お楽しみのあれですよ」

「そうだぜ！このために朝牛丼食ってきたんだから」

「えっ？なに？なにがあるの？」

「まっまさか！スバル君、ミソラちゃんのライブのチケット持ってない？」

「え～～～～～！今日ライブって聞いてないよ！キザマロ教えてよ」

「スバルはライブなしだな。可哀そうに。」

『ふっドンマイだなスバル』

「うわ～。ブラザーのくせにわすれるなんて。スバル君」

そしてライブ二時間前、スバルだけ帰宅となった・・・

「はあ～。ミソラちゃん怒ってるかな？ライブ来てねーって言われてたし・・・」

『お前が悪いな。まあ帰るしかねーだろ』

とスバルは帰宅することになった

## 中学校の準備（後書き）

長いか？まあいいでしょう

**ライブ前・・・（前書き）**

ふう、連投で　あ、後ここら辺戦闘ないんで

**ライブ前・・・**

バス停にスバルがいた時に電話がきた

「ん？だれだろ？　ブラウズ！」

「す～ば～る～く～ん！！！なんでライブ会場にいないの！来てって言ったよね！」

この女の子こそトップアイドルで「自称戦うアイドル」、響ミソラ。電波変換でハープノートになる。

「ごめん！・・・（忘れてたなんて言えないし、どうしよ？あ、そうだ！）チっチケットが売り切れて　てさ・・・」

「はあ～。スバルく～ん、忘れてたんでしょ・・・特等席用意してるってメールしたじゃん」

「えっ、じゃあライブ見られるの・・・やった～　今すぐ行く」

「今どこにいるの？できれば楽屋に来てほしいんだけど」

「いま、スピカモールのバス停だからすぐ行くよ」

「うん♪早く来てね～♪」

というわけでスバルもライブを見れることとなった。

そして楽屋。

「失礼します。あ、ミソラちゃん久しぶり！」

「何が久しぶりよ！ライブ忘れてたくせに！」

「（まずい怒ってる）ごめん！ほんとに」

「ふふっ、怒ってないよ♪演技♪」

「え、怒ってないの。（よかった～）」

『おい、ミソラ。お前がいるってことは・・・』

『何よ人を悪党扱いして～、ウォーロック』

『っげ、出たハープ』

ハープとは、ＦＭ星人でミソラのパートナーである。

「スバル君、あと1時間半くらい時間あるし。モールまわんない？」

「いいよ、（ライブ忘れてた貸しがあるし・・・）どこいく？」

「う～んと・・・とりあえずパフェ食べて、それから駄菓子屋に・・・」

デート気分の二人であった。そしてライブ直前まで飛ぶのであった。

## ライブ前・・・（後書き）

次はライブですね

## ライブ！（前書き）

戦闘しばらくないって言ってたけど　次やる予定だったんでした
すんません

**ライブ！**

「み～ん～な～！来てくれてありがとう！盛り上がっていくよ～♪」

「委員長始まりましたよー！」

「うおーーー！！！始まった！！ミソラちゃ～ん！！」

「ゴン太！うるさい！」

委員長グループは一番前の列。と、言うのもキザマロがチケット発売日前日から店に並んでいたからである。

少し離れて、舞台裏。ここにスバルはいた・・・

「うわ～。横から見ると違うねー　こんな近くで見られるなんて！」

『そうだな！でも俺は見れないわ・・・』

「なんでロック？」

『いや・・・ハープが・・・』

『お呼びかしら？いくわよっ』

『いやだ～！助けてくれスバル！う、ウワ～』

地球は救えても、ロックを地獄からは救えないスバルであった・・

・

そんな時・・・

「ドガ～ン！！！」

「ばっ爆発？ロック行こう、っていないか？」

『おう、いるぜ。逃げてきた』

「んじゃ行くよ、トランスコード００３、シューティング・スター・ロックマン！」

ウェーブロードに行くと、ジャミンガーがいた。

『所詮クズか、久しぶりの戦闘腕がなるぜ！』

「ロックはいつも勝手にウイルス撃退してるじゃん！」

『ロックマンとしての戦闘だよ、ひさしぶりなのは！』

「いくよ！ロック」

『おう！』

**ライブ！（後書き）**

次はジャミンガー戦　余裕です

## ライブ再開（前書き）

ジャミンガーって流星1しか出てなかった気が・・・

## ライブ再開

「ロックバスター！」

ジャミンガーは、不意打ちを食らって大ダメージ、もう瀕死だ。

『スバル、とどめだ！』

「うん。バトルカード、キャノン！」

ジャミンガーはなぜか反撃もせず、ニタッと笑ってデリートされた・・・

「ふう、終わったね」

と、そんな時スバルは周りが見えてなかった・・・

『おい、スバル。お前にしては珍しく目立ちたがったか？ふっ』

「えっ？」

そう、スバルはライブのステージのど真ん中で戦闘をしていたのだ。ライブはミソラだけでも

パニックなのに、ロックマンの登場でさらに大変なことに・・・

「「「「「「「「ワ～～～！！！世界を救ったヒーローとミソラちゃんの共演だ！！！」」」」」」」

「うっ！まずい、ロックどうしよう？」

『しらねーな、そんまま目立っとけ』

「え～！僕、目立つの嫌いだって・・・」

そんなヒーローの心情なんて関係なく、ライブはさらに盛り上がっていく。

「みんな～！今日は世界を救ったヒーローも来てくれたし、最後の曲は一緒に行くよ～♪」

ミソラはロックマンにウィンクした。

「（は～・・・一緒にって何すればいいの？）」

「それじゃー行くよー♪シューティングスター！」

「「「「ワ～！！！！！」」」」

「ウェーブロード　広い世界　夜空見上げ　一人ぼっち　キズナ探して　ただ　彷徨う

ウソに怯え　逃げ続けて　孤独にさえ　気がつかずに　ただ　歌い続けていたの

星の光が　輝く　私の　ココロに　降り注ぐ　そして　あなたと巡り合えたんだ

Ｏｕｒ　ｂａｎｄ　ｗａｓ　ｄｉｓｃｏｖｅｒｅｄ　ｔｈｅｎ

震えて　泣いていた　私を　見つけてくれたね　シューティング・スター　暗闇　照らし　駆けてく

その　笑顔に　チカラ　もらうんだ　怖いものなんか何もない

振り返らない　ずっと　前を見て　光　掴む　キミの　笑顔　それが　私の　ハートなんだよ

シューティング・スター　暗闇　照らし　駆けてく」

会場は最高潮に盛り上がって幕を閉じたのであった・・・そしてライブ終了後。

～委員長グループ～

「なんでスバル君が出てきたのですかね、マロ辞典にも載ってないですよ」

「そんなことより、駄菓子屋行こうぜ委員長。腹が減った～」

「マロ辞典とやらに載ってるわけないじゃないの、あとゴン太、駄菓子屋にはいかないで帰るわよ」

「え～、いかないのかよ～」

「いくわよっ！」

という感じでコダマタウンへ帰って行った委員長グループだった。

## ライブ再開（後書き）

次はスバル視点で

## ライブ後（前書き）

ライブ後ですね

**ライブ後**

～スバル&ミソラ～

「ふう、まさかステージのど真ん中に自分がいたとは・・・恥ずかしいよロック」

『仕方ねーだろ　ックック、俺は目立ててよかったぜ』

「まあロックはそうだけど・・・」

と、舞台裏でそんな会話をしていると

「ス～バ～ル～く～ん♪　かっこよかったよ♪」

ライブが終わってすぐなので、ライブ衣装のまま走ってきた。

「あ、ミソラちゃん　おつかれ」

「うん、スバル君のおかげでジャミンガーに邪魔されずに大成功のライブだったよ♪」

「んじゃ、僕かえ「ちょっと、このあと楽屋に来てくれない？」」

「あ、うん　いいよ。んじゃ先行ってるね」

「うん　すぐ行く♪（今日絶対言うって決めてたんだから　ファイトよミソラ）」

『ふふっ、今日こそ伝えるんでしょ　ミソラ』

「うん・・・ライブよりドキドキするな・・・」

『だいじょうぶよ♪ミソラなら』

「でっでも、もしスバル君が私のこと嫌いなら・・・まっまたは、委員長のことが好きとか・・・」

と、一人で緊張しているミソラと何も知らないスバルであった。

## ライブ後（後書き）

次は告白・・・と言いたいんですが邪魔が入ります

**告白・・・失敗・・・（前書き）**

どんどん進めたいんだけどなー

**告白・・・失敗・・・**

～楽屋内～

「ミソラちゃん遅いな～　なんか話あんのかな～」

スバルは広めの楽屋にポツンと一人でいた

「なんだろう？いつもより顔が赤かったような・・・」

『ふんっ、俺はわかったぜ、名探偵の俺の推理では・・・ずばり！』

「ずばり？なに」

『ズバリ・・・あいつは・・・「ガチャ！」』

「はあはあ・・・スバル君待った？マスコミとマネージャーに追われてて」

「いや、大丈夫だよ、んでなんの話？」

「あっあのさ、すっスバル君て・・・好きな人いる？・・・」

ここでスバルは少し今回の話を感ずく、ミソラは顔が真っ赤だ

「いっいるよ（まさか・・・この展開は）」

「あのさ、わたしスバル君のことが・・・「ガチャ！！！ミソラいるか？」」

マネージャーが駆け込んできた、そして

「おいミソラ、ドラマの撮影の時間だぞ！急いで準備しろ！」

「・・・うん（せっかくいいところだったのに）」

「んじゃ、ミソラちゃん　僕は行くね（まさかな～ミソラちゃんが僕のこと・・・）」

『いくか　スバル』

と、雰囲気ぶち壊しで今回は終わってしまうのだった。

## 告白・・・失敗・・・（後書き）

マネージャー出てきちゃって台無しですわ

## 暁の呼び出し（前書き）

冬休み入る前に１０話こえたい！

## 暁の呼び出し

あのあと、スバルは帰宅した。

そして春休みも終わり・・・入学式前日

「あ、暁さんからメールだ、なになに・・・」

〔おう、久しぶりに送ったぞスバル、ちょっと明日来てくれないか？学校には一週間休むってことで〕

「え、なんだろ？学校休むまでってことは大事なことかな」

『まあ　行くしかねーだろ』

スバルはこのことを母に伝え許可をもらって入学式から一週間休むこととなった

～謎の大陸～

「ポセイドン様、地球で何か動きが・・・」

「まったく、小賢しい・・・」

「先の探索隊と関係があるのでしょうか？」

「あるとしたら、ぶちのめすだけだ」

と言い残しポセイドンは奥の間へきえていった・・・

## 暁の呼び出し（後書き）

なぞですな

**「・・・ポセイドン・・・・」（前書き）**

なぞめいてます

「・・・ポセイドン・・・・」

～ＷＡＸＡ本部～

「ここひさしぶりだね～　あの事件以来か・・・」

『おう、また事件が起きりゃ暴れられるぜ！』

「いや、平和な方が僕はいいんだけど・・・」

そして中に入る二人であった。

「暁さん！久しぶりです」

「おう、サクサクサク、ひさ、サクサクしぶりだなサクサクサク」

「はい、けがは治ったのですか？」

「おう！このとうり元気だ」

うまい棒を食べ終わった暁は答えた。

『あいつは元気なのか？』

『久しぶりですねロック・・・ちゃん』

アシッドはヨイリー博士のようにしてロックをからかう

『てめー　ぶっ殺すぞ！』

ロックはやはり好戦的なのであった。

「それで、暁さんなんの用事で？」

「ああ、ちょっと司令室まで来てくれ」

～司令室～

「この音声を聞いてくれ・・・」

＜ザ～・・・アト・・・・ス・・・の・・・・・ポセイドン？・・・・・・ザザ～＞

「なんですかこれ？ポセイドン？」

「ああ、俺たちもわからん、この調査隊はＷＡＸＡっていっても独立してた調査隊だからな」

「独立ってどういうことですか」

「ＷＡＸＡのなかで、何かを研究してた部隊らしいんだが・・・何をやってたか上に報告してなかったらしい」

＜ポセイドン＞という言葉しかわからない暁＆スバルは調査を進めた

「でも、暁さんなんでぼくがこの調査に？」

「それは・・・ヒーローだから、じゃだめかな？」

『（暁のヤロー、何か隠してやがる）』

「まあ、いいですけど・・・」

そして、通信の発信源やら、調査隊の部屋を片っ端から調べたが・・・

「部屋からは何も出なかったそうですよ、暁さん通信は？」

「サクサクサク、今ヨイリー博士が調査中だ」

「シドウちゃん、あ、それからスバルちゃんちょっときて」

ヨイリー博士に呼ばれて行ってみると・・・

「この調査隊はね、通信の発信源をつかませないために鍵をかけてるの」

「いったいなんのために？」

「わからないけど・・・今からじゃもうこの事件は迷宮入りってことね」

「サクサクサクそうですかサクサク」

この調査で一週間経ってしまったのでスバルは調査メンバーから外れた

「シドウちゃん、スバルちゃんがまた地球を救ってくれると？」

「はい、彼は俺が認めたヒーローなんで・・・」

「あの大陸の力は強大だけど・・・スバルちゃんを巻き込むつもり？」

「彼の力がなければ・・・あの大陸とその裏で動いてる組織には勝てないと思ってますんで」

何か知っている二人はまた調査を始めた・・・

～闇の組織～

「Y、次の計画へ移ろう・・・これが私の計画の一歩だ」

「ふふふっふ、俺は殺しができりゃいいんだけどな」

「まあそう言うな、まだお前は動かん。トート、ハイドとやらを呼んで計画をやらせろ」

「はっ、Z様了解です」

「おいブラック・・・いやZよ　なぜそこまでしてロックマンとやらを狙うんだ」

この暗い部屋で光っている画面にはスバルとミソラのデーターが・・・

「ふっ、計画は１００％の成功率に成るように邪魔者は消すもんだよ・・・」

「卑怯な手を使ってもか？」

「そうにきまっている！」

「ふ～ん、まあ俺には関係ないか・・・」

そしてYと呼ばれる男は闇へ消えた・・・・・

## 「・・・ポセイドン・・・」（後書き）

闇の組織ってなんでしょう？
感想待ってま～す！

## 中学校初登校（前書き）

中学校に・・・

## 中学校初登校

『クソ！起きやがれ～！スーバールー！！！』

「Ｚｚｚ～Ｚｚｚ～　・・・・・・」

例のごとく起きないスバルかと思いきや・・・

『ちっ、こうなったら・・・』

「おきてるよ！いつもロックがどうやって起こしてるのか調査してたんだけど」

『最終手段は今日はなしか・・・』

「最終手段って何？まあいいや、ご飯食べよ」

時刻は７時１０分、意外と今日は早めなので余裕でご飯をたべて学校へ向かった

「委員長今日は来ないんだった、これならもっと遅くに起きればよかった・・・」

『うるせー！こっちの身になれ！まあいい、急げスバル』

～学校～

「おはよう委員長、キザマロ」

「あらスバル君、久しぶり。」

「スバル君、委員長はまた委員長になりましたよ」

「そうか・・・あれゴン太は？」

「おうスバル今来たぜ！」

と、一週間ぶりに委員長メンバーと話すスバルだった。そしてチャイムが鳴りみんな座った

「あれ、僕の横ってだれ？」

「スバル君知らないんですか、この席は・・・「ガララ」」

「お～い、みんなー席についてるか？」

とは言ってきたのはどこにでもいそうなふつーの先生（先生たちはストーリーにあまり出ません）

「お、あいつはまた遅刻か～んじゃ出欠取るぞ～あ、その前にスバル自己紹介しろ」

「はっハイ」

前に出るスバル

「えーっと、星河スバルです。よろしくおねが「ガラガラガラ、バン！」」

「すいませ～ん、遅れました♪あっ！すばるくん！」

と遅れてきたのはミソラだった、スバルは超びっくり&他のクラスメートは落ち着いている

「早く席につけ、まったくアイドルだからっていつも遅刻とは・・・」

そしてスバルの自己紹介もおわり、席に着いた

「ミソラちゃんがこの学校なんて聞いてないよ、キ～ザ～マ～ロ！」

「なっ、僕のせいですか。マロ辞典には前から載ってましたよ」

「ま、いいじゃないの二人とも。宜しくねスバル君♪」

クラスメートの何人かはなぜスバルがミソラと知り合いなのか分からず、他の生徒はスバルがロックマンだからだと知っていた

・・・そして帰りのホームルームが終わった

『帰ろうぜスバル！』

「うん、ん？メールだ・・・ミソラちゃんからだ」

〔放課後展望台に来て、この前伝えたかったこと言うから・・・〕

スバルは顔が赤くなった、とうのミソラはというと

「はい、ちょっと待って、今サインするからはいはいおさな～い」

生徒からのサイン要求で忙しそうだった

「んじゃ、先に行くかロック」

『おう！』

展望台へ向かったのだった・・・

## 中学校初登校（後書き）

王道を少しいじくってみました（ふつうはミソラが転校生だったので）

次は告白です　上手く書けるかな？

## 告白のまえ（前書き）

ついに十話こえたか～

## 告白のまえ

～展望台～

「ミソラちゃん、まだかな～」

かれこれ1時間待っているスバル

『まあ、あいつもアイドルだしな』

「ロック、この前・・・ズバリ！って言ってたけどミソラちゃんの話ってなんのことかなー？」

『ああ、ズバリ・・・新発売のうまい棒の話だろう』

ドヤ顔をするロックを引いた目で見るスバルはどうすればいいのか分からなかった

「そっそうなのかな？（まさか、ここまでロックが鈍感とは）」

『おう、なんなら俺を名探偵って呼んでくれてもいいんだぜ』

『んじゃ、行きましょうかKY探偵♪』

『っげ、ハープ！いやだ～』

さ～よ～な～らロックとばかりに手を振るスバルだった

## 告白のまえ（後書き）

次こそは告白、ってかロックばかすぎやろ！

## 告白（前書き）

やっとか〜つかれたわ

# 告白

～スバル視点～　３時間後（待ち合わせ時間から４時間半）

ロックがいなくなってからすこしたったが、ミソラはまだ来なかった・・・

「ハープが来たからすぐ来ると思ったんだけどな・・・」

「うう、さむっ。ハッハクション・・・まだかな～」

すっかり暗くなり、夜空には星が輝きだした・・・

「母さんに遅くなるってメールしておこう・・・」

スバルはドキドキしながらミソラを待っていた

～ミソラ視点～

「ううわ～！！！や～ば～い！！！」

全力でダッシュするミソラ、なんとあの後マネージャーに呼び出されて・・・

「スバル君怒ってるかな～・・・このままじゃ・・・」

電波変換したいとこだが、ハープにロックの面倒を任せたためできなかった

「ぐすっ（スバル君に告白するときに泣いててどうするんだ・・・）」

涙をこすってやっと展望台へ着いた

「（あ、スバル君待っててくれてる）」

～通常視点（スバル視点）～

「あっ！ミソラちゃん！」

「ごめんスバル君こんなじかんまで・・・（おこって・・・ない？）」

「（ちょっと意地悪してみるか・・・）遅い！」

「（まずい）ごめん！ほんっとごめん！！！」

「ふふふ、おこってないよ・・んでなに？」

「あっ、あのさスバル君、わっ私とさ・・「待って！！！」？」

「ぼっ僕から言うよ・・・」

「（えっ？）」

「ミソラちゃん！前から・・・前から好きでした・・・僕と、付き合って下さい！」

「私こそ、好きでした・・・よろしくお願いします」

そう言ったミソラは涙目だった、

「んじゃ、夜遅くだし帰ろうよ」

「ぐすっ、うん・・・」

「（泣いてる？）明日また学校で逢おうね」

「ふふっ、明日は土曜日だよ。でもさ、うちこない？スバル君来たことないし・・・」

「ベイサイドシティーだっけ？」

「うん、スバル君の家に迎えに行くから♪んじゃ～ね」

「うん」

家に帰る時二人は顔が真っ赤だったとさ・・・

## 告白（後書き）

今日はここまで・・かな　次も書きたいんだけどな～
感想まってます！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4615z/

流星のロックマン４　～Ａτλαντ??　mystery～

2011年12月17日20時47分発行